

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑬

もう半世紀にもなる。初めて五葉山登山をしたのは昭和三十五年八月であった。私は今の住田高校の前身である盛農学校定時制課程上有住分校の二年生で、登山の企画は二年先輩の方々が中心になって進め、後輩たちも賛同した。

道も広くなり舗装されたが、当時は細く曲がりくねった砂利道をボンネットバスが坂道ではあえぐように走っていた。

中卒から檜山集落の終点部までは二ヶ、檜山から五葉山麓中腹にある大船渡宮林署の小屋まで六ヶ、この小屋から五葉山頂上を目指し、山麓の西側斜面を稜線に向かって進む。

急な上り坂が続く。宮林署の小屋まで来るのにも大変だったのに、これから登山の本番と聞かされ先が思いやられる。大きな木々が文字通り林立する。直径が一丈を超える樹木の中を通り、何度となく大きな石を這い上がる。

汗がシャツをすっかり濡らし、肩で息をする状態になっていた。背負っていたリュックサックが重みを急に増していく。尾根は牛の背のよう

その日は山小屋で泊まり、翌朝の日の出を期待した。が、あいにくの雲に覆われて両手を広げたような大きさに見えるという日の出を拝むことができなかったのは、今でも心残りである。

五葉山登山にはつらく苦しい思い出だけが先に立ってしまうが、ここ数十年、山麓の五葉山森林浴道に足を運んでいる。砂利道や急な山道をどこまでも歩き続け、生涯忘れ得ぬ思い出となった高校時代の五葉山登山。五葉山麓の森に抱かれていと思う出す。私を励まし、元気づけてくれた仲間たちお一人おひとりの姿を。エネルギーッシュに五葉山登山を企画した先輩たち。青春そのものが、そこにはあった。

女生徒が企画した登山

住田町上有住

皆川 マツ

女生徒だけの登山にはいささか不安があり、私の住む天嶽(あまたけ)地区の青年団と一緒に登ることとなった。総勢十三名。

天嶽から登山道の入り口となる中卒(なかぞね)まではバスを利用。今は

「もう駄目だ」と何度思ったか知れない。それでも、青年団や高校の先輩たちや同級生が声をかけ、励ましてくれる。

「やったー、五葉山だ」。声にならない声で叫んだ。頂上付近からは深く切り込まれたリアス

木々を渡る風、葉が擦れ合う音、森のにおい、沢の冷涼さ、柔らかな土……その一つひとつに森にいたことの心地よさを感ずる。

気持ちとを和らげ、心を落ち着かせる。人を素直にさせ正直にさせる。そんな力があの五葉山麓にはある。

【執筆者プロフィール】住田町上有住在住、六十四歳。四十年前百一歳で逝った母、二十年前八十六歳で見送った父。実家での一・五ヶの道を雨の日も雪の日も看護のために通い続けた。道端から見えた風景や難儀して登った五葉山の頂上からの眺望、今も昨日のことのように思い浮かぶという。

リレー
エッセイ

「もう駄目だ」と何度思ったか知れない。それでも、青年団や高校の先輩たちや同級生が声をかけ、励ましてくれる。

「やったー、五葉山だ」。声にならない声で叫んだ。頂上付近からは深く切り込まれたリアス

木々を渡る風、葉が擦れ合う音、森のにおい、沢の冷涼さ、柔らかな土……その一つひとつに森にいたことの心地よさを感ずる。

気持ちとを和らげ、心を落ち着かせる。人を素直にさせ正直にさせる。そんな力があの五葉山麓にはある。

【執筆者プロフィール】住田町上有住在住、六十四歳。四十年前百一歳で逝った母、二十年前八十六歳で見送った父。実家での一・五ヶの道を雨の日も雪の日も看護のために通い続けた。道端から見えた風景や難儀して登った五葉山の頂上からの眺望、今も昨日のことのように思い浮かぶという。



緩やかな稜線にひっそりと佇む五葉山神社。この場所に立つと、遠い高校時代の登山のことを思い起こす